

リズムダンスの学習支援教材『白桃ダンス』の開発について

酒向 治子

本研究者が2011年に教師と協働して取り組んだ「現代的なリズムダンス」授業づくりのプロセスを経て、教育現場で授業づくりの模索を続ける教員に寄り添った教材の必要性を感じた。この体験を契機として、2014年に岡山大学スポーツ支援室(旧:スポーツ教育センター)の協力の下、ダンス学習支援教材「白桃ダンスプロジェクト」を立ち上げ、ダンス教材『白桃ダンス』の開発と普及を行うこととした。本稿では紙幅の都合上コンテンツ開発に焦点をおき、制作プロセスを踏まえつつ教材の核となる理念とその具体的な内容についての整理・分析を行った。

Keywords : ダンス教育, リズムダンス, 身体表現, 白桃ダンス, LOD

I. 背景および目的

1. 舞踊教育を取り巻く環境の変化

1980年代後半以降、学校教育におけるダンス教育のあり方はめまぐるしい変化を遂げている。1989年(平成元年)の学習指導要領改訂により選択履修となり、2008年(平成20年)の学習指導要領改訂で中学校では男女必修となった。従来男女別カリキュラムとして展開されてきたダンス教育は、制度上の男女共修が確立され現在に至っている。またダンスの種目に関しては、戦後の教育改革の中で採り入れられた「創作ダンス」・「フォークダンス」に加えて、1998年(平成10年)の学習指導要領改訂で「リズムダンス」(小学校では「リズムダンス」、中・高等学校では「現代的なリズムのダンス」、以下本稿ではリズムダンスとする)が加わり、3本柱となった。ダンス学習カリキュラムは拡充し、生涯教育としてのダンス(「ダンス・フォア・オール」)が実現する基盤が整った状況にある。

一方で、ダンス学習未経験の教師がダンスを教えるという状況にもなり、教育現場は混乱を極めていく。TVやインターネットでは多くの歌手やダンサーによる、「見せるための(エンターテイメントとしての)振り付けダンス」の情報が溢れかえっている。これを受けて、全国の表現運動・ダンスの授業ではエンターテイメント系ダンスが盛んに取り上げられ

るようになった。学習内容を吟味した上でダンスの授業を行うというより、運動会や体育祭などのイベントで振り付けダンスを披露することでダンス領域の学習を消化するという流れが全国的に広まっている。既成作品を模倣する習得型・模倣型の学習に終始し、本来あるべき探究型の学習になっていないのは、大きな問題である。

2. 学習者および指導者のダンスに対する否定的な態度

エンターテイメント系のダンスが周知されたことにより、ダンスが世間一般に認知されたというダンス教育にとってプラスの面がある。しかし、そのプラスの面を凌駕する勢いで、ダンスへの偏ったイメージを強化し、強い拒否反応をもつ人を大量生産したことも否めない。筆者は毎年100人以上の教員志望の大学生を対象に、必修としてダンスの授業を教えているが、学習前には半数以上がダンスに対してマイナスの感情を抱いており、その中でも、<技能の達成度が求められる>、<イメージに基づく羞恥心・抵抗感>が特に顕著に表れる。彼らが過去に体験してきたダンスとは振り付けダンスが多い傾向にあり、それらの多くは、「きちんと」「しっかり」「ちゃんと」という言葉で指導される、フォームが揃っていることの均整美、技能の達成度が求められ

る。技能の「できる／できない」が明確になることから、できない児童・生徒にとっては、＜ダンスを主体的に見せている自己＞というより、＜晒されている、嘲笑の対象となっている自己＞という感覚が生まれる¹。成長期で心身の揺らぎが大きい時期に、身体を晒して恥をかくということは、ダンスへの否定的態度や拒否反応に繋がっている可能性が高い。

また、ダンスに対する苦手意識は、学習者だけでなく、指導者側にも強く見られる。体育領域の中でも、特にダンス指導に不安を抱える教員が多いことは、これまでも先行研究において指摘されてきた²。その背景には教員の多忙化やカリキュラム編成上の問題、体育科目におけるダンス領域の位置付けなど、教育現場の様々な問題が複雑に絡みあっている³。本来あるべきダンス教育を実現することの困難さが、児童・生徒のダンスに対する否定的な感情を育み、ダンスへのイメージの偏りがさらに学校現場でのダンス教育を歪ませるといった負の連鎖が形成されている。

3. 学校教育現場の実状を踏まえたダンス教育支援教材の必要性

2011年（平成23年）に、筆者はダンス指導に不安を抱える教師の要請に応じて、協働しながら「現代的なリズムのダンス」の授業に取り組んだ（酒向他, 2015）。無数の問題を肌で知ることによって、教育現場で模索を続ける教員に寄り添った、ダンス学習支援教材の必要性を感じた。この体験を契機として、2014年に岡山大学スポーツ支援室（旧スポーツ教育センター）の協力の下、ダンス教材の開発と普及を行うプロジェクト（「白桃ダンスプロジェクト」）を立ち上げることにした。プロジェクトは、コンテンツ開発と普及啓発を射程に入れたものであるが、本稿では紙幅の都合上コンテンツ開発に焦点をおき、制作プロセスを踏まえつつ教材の核となる理念と具体的な内容についての整理・分析を行うことを目的とする。

II. 結果および考察

II. - 1. 教材開発の土台となる方向性

「白桃ダンスプロジェクト」では、3つのダンス種目のうち、学校現場での実施率が高い傾向にあるリズムダンスに焦点を当て、『白桃ロック』と『White Peach Rap』という二種類のダンスの制作を行うこととした。『白桃ロック』は縦ノリのリズムを基本とし、『White Peach Rap』はヒップホップのリズムで構成され、縦ノリと比べてリズムがとりにくい裏拍子が強調されている。『白桃ロック』に比べて、

学習者が主体的に動く部分（後述する即興や動きの再構成等の学習者が自らオリジナルな動きを考える部分）が組み込まれており、学習プログラムとしては『白桃ロック』が基礎編、『White Peach Rap』が発展的学習に進む応用編と位置付けられている。これらのダンス制作にあたり、土台となる方向性は以下の通りであった。

1. 指導者の負担の軽減(覚えやすさと使いやすさ)

(1) 動画, CD, リーフレットの制作

本プロジェクトで制作した支援教材は、『リズム系ダンスのための新しい支援教材①～白桃ダンス～』（酒向, 2014）および『リズム系ダンスのための新しい支援教材②～白桃ダンス～』（酒向, 2015）の二つとなる。

①は本プログラムの基本となる指導動画、音楽CD、教材内容を記したリーフレットをセットにしたものである。②は、基本プログラムに『白桃ダンス』の世界観を映像化したPV動画をつけた教材である。音楽については、リーフレット表紙左上の「収録内容」のCD内容に記載されているように（図1）、『白桃ロック』／「ロック」「inst.スロー」「inst.ノーマル」、『White Peach Rap』／「ヒップホップ」「inst.スロー」「inst.ノーマル」とそれぞれ3つのバージョンがある。これは、教育現場では音響設備の状況が異なるため、できるだけ使用しやすいように工夫している。一つ目は基本となる音楽、二つ目「inst.スロー」は、テンポ調節ができない音響機材を用いる場合に対応できるように、曲のテンポを遅くしたものである。三つ目「inst.ノーマル」とは、曲のテンポはノーマルで、音楽の中で指導者の声が届くように歌詞を抜いたバージョンであり、指導者が状況に応じて使い分けができるようになっている。また、音楽の歌詞に、「手をたたけ！」など、具体的な動きの指示を入れており、指導者の声かけを支援する工夫をした。

(2) 繰り返し部分を多くすることで負担を軽減

『白桃ダンス』は、『白桃ロック』と『White Peach Rap』共に30分ほどで通して踊れるようにするために、覚える要素をできるだけ少なくするように構成されている。楽曲の最も印象に残る部分である「サビ」は、『白桃ロック』では3回、『White Peach Rap』では5回と繰り返すようになっている。「サビ」を多くすることで、指導者の負担を減らし、学習者が覚えるより踊る時間をより長く確保できるようための工夫である。

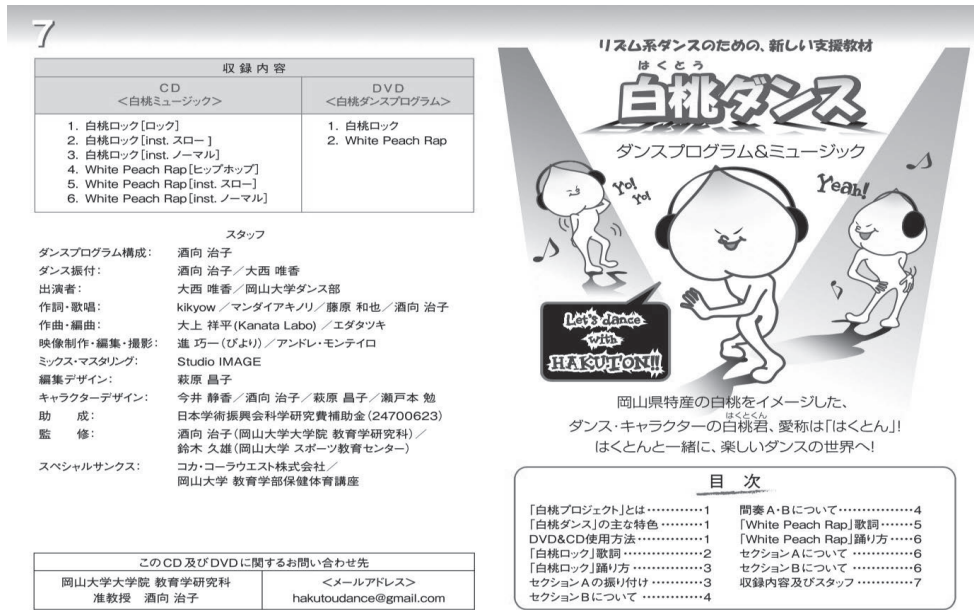


図1 支援教材 ①リーフレット表紙

2. 「ダンスの世界観（イメージ）」と「四つのくずし」

(1) 「ダンスの世界観（イメージ）」

「学習者の技能を高める」という観点から、指導者は学習者の動きのフォルム（形）を揃え、音楽に合わせるために、「1. 2. 3. 4・・・」というカウントによる運動になる傾向がある。音楽は作家が思い描いた世界観（イメージ）によって創られており、本来音楽と共に踊るとは、音楽がもつ世界観（イメージ）の解釈や、イメージを身体の動きで共有し、音楽とかけあう面白さを体験することである。しかし多くのダンス授業の場合、この個々の楽曲が放つ世界観（イメージ）の解釈まで行き着かず、リズムの速さやカウントが重視されがちである。そこで、本教材では、音楽と踊りがイメージを共有できるように、核となる世界観（イメージ）を創ることを目指した。

(2) 「四つのくずし」

村田は、教師中心主義の一斉型授業や、子ども中心主義の放任型授業に陥らないためのダンスの指導

の工夫の観点として、「四つのくずし」を提唱している（村田，2011）。

- ①「空間（場）のくずし」：方向や場の使い方を変化させる。場を広く使って踊る。
- ②「時間（リズム）のくずし」：素早く、ゆっくり、急に止めてなどリズムを変化させる。
- ③「体のくずし」：ねじったり、回ったり、跳んだり、体の状態を多様に変化させる。
- ④「人間関係のくずし」：離れたたり、くっついたり、かけあったりなど、他者とかかわって踊る。

筆者は先述の世界観（イメージ）を核として、「四つのくずし」を以下（図2）のように構造的に捉えた上で、教材作成を進めた。

II. - 2. 『白桃ダンス』の内容

1. 世界観（イメージ）

本教材の世界観（イメージ）として、「はくとん」（吉備山白桃（きびやまはくとん）君，の略称）というイメージ・キャラクターを考案し、音楽・ダンス・映像全てをこのイメージ・キャラクターの世界観で創ることとした。「白桃ダンスプロジェクト」

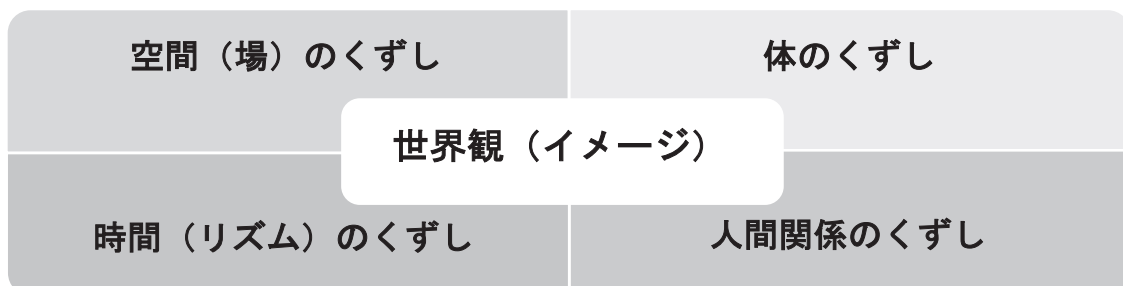


図2 イメージと四つのくずしの構造図

の企画を立ち上げた2013年には、くまモン（熊本県庁考案のキャラクター）が爆発的な人気を得て、これを契機に地域の自治体、教育機関、企業等が「ゆるキャラ」を用いたイメージ広報戦略を行うことが流行し、その盛り上がりは最高潮となっていた（2019年の今ではブランディングやマーケティングには必須となっている）。本企画の出発点が岡山であったことから、特産物である白桃に着目した。またこのキャラクターは岡山大学で生まれたという設定とし、岡山で日々研鑽を積む「ダンスキャラクター」という設定にした⁴。キャラクターの姿については、岡山大学の学生が描いたラフ画（図3のイラスト案③）を基に、TV「やさいのようせい」⁵アニメーション制作に携わった瀬戸氏の協力を得て案を出してもらった（イラスト案①②）。学生を含め①～③を数百人のモニタリングを通して、案①に決定した。

『リズム系ダンスのための新しい支援教材①～白桃ダンス～』を2014年に完成した時点ではキャラクターはイラストのみであったが、その後世界観（イメージ）を伝えるために着ぐるみを制作し、さらに岡山大学を撮影場所としたPV動画を作成、次年度2015には『リズム系ダンスのための新しい支援教材②～白桃ダンス～』を完成させた。これらの動画は、動画投稿サイトyoutubeにアップし、学習者お

よび教員が常に参照できるようにした⁶。

2. 「四つのくずし」

以下、『白桃ダンス』の中でも『白桃ロック』に焦点を当てて、「四つのくずし」の観点から、『白桃ダンス』の（ここでは紙幅の都合上、特に『白桃ロック』に焦点をあてつつ）特徴を見ていく。

（1）空間のくずし

本稿の冒頭で学習者のダンスへの抵抗感について触れたが、エンターテインメント系のダンスを過度に重視することの危険性は、「踊る人（演者）と観る人（観客）」の対比構図が明確となり、見られる側となった演者に羞恥心が芽生え、ダンスへの抵抗感を生む主要因となりかねないことである。他者の目を気にすることなく、心身を解放して踊る楽しさを味わうために、踊る空間の「正面」をなくし、演者が常に流動的に移動し、定点に止まらないプログラム構成とした。「他者に見せる」のではなく、全体を通して、「他者と関わる」ことに重きを置いている。特徴的であるのは、プログラム「間奏B」、歌詞カードには記載されていないが、ボーカルの「お前ら、走れー！ 飛べ！ 大地を蹴って飛べ！ 転がれ！ まだまだいけるんだろ、お前ら、暴れろー！！」というセ

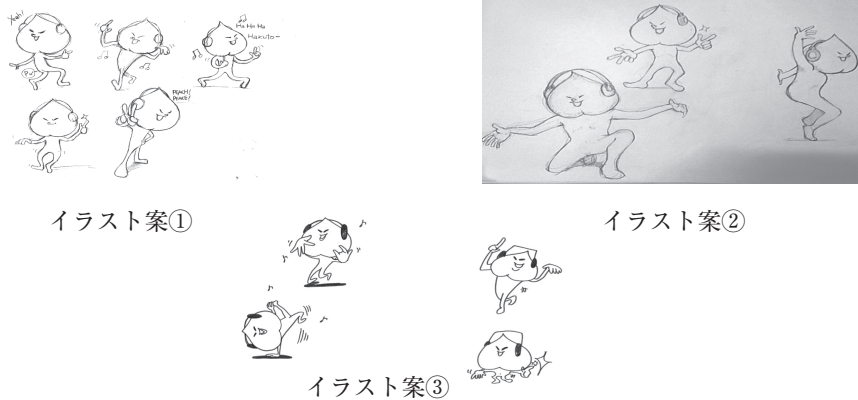


図3 支援教材「はくとん」キャラクター案①～③



図4 支援教材『白桃ロック』PV

リフの中、演者が「走る-跳ぶ-転がる」という動きを繰り返しながら、多方向に散る部分である(図5)。演者は、追い立てられるように走り、跳び、転がる中で、移動をすることが求められるため、この間奏終わりには、男女固まることもなく、バラバラに点在することとなる。

(2) 時間(リズム)のくずし

『白桃ロック』のBPM(音楽のテンポ:Beats Per Minute)は135とやや高め(アレグロ)で、弾みやすいように、拍に強いアクセントを加えている。プログラム上のリズムのくずしとして具体例をあげると、3回目のセクション(A)のあとで、「歌え~踊れ~革命の鐘を鳴らせ~」のセクションである。ここは今までの弾むリズムから一転、スローモーションを促すゆっくりとした曲調となっている。

(3) 人間関係のくずし

『白桃ロック』では、「人間関係のくずし」の部分も意図的に創っている。最初のセクション(A)前の「退屈なEVERY DAY~」、また最初のセクション(B)、間奏Aのあとの「貫けよEVERY WAY」

のセクションは、二人組みで関わり手や肘をつないで回ったり、バランスをとったりするなど、パートナーチェンジをしながら他者との交流を楽しむ部分である。

(4) 動きのくずし

【二つの動きの方向性】

ダンス学習の核となる動きの考え方は特に重要であり、本教材では二つの異なる方向性を考えた。一つは、学習者が「できる・できない」という技術的達成度に捉われず、リズムに乗って動く楽しさを体感するために、歩く、走る、手をたたく、足踏みをする等々の、特に練習を必要としない<シンプルな動き>を採り入れるという方向性である。二つ目は、動きの学びの系統性という観点から、学習者の状態によって難易度を調整できる<多様な動き>への方向性である。この二つ目の方向性「多様な動き」を実現するために、本教材ではラバンの運動理論を基に構築されたLOD理論(Language of Dance:[ダンス言語]の略称)⁷を活用することを試みた。

ダンスには様々なジャンルやスタイルがあり、それぞれが技に名前がつき、体系化されている。例えば、バレエでは、プリエ、タンデュ、ルルベ、ヒップホップではボックス、クラブ、ランニングマンなど等々の基本動作があり、その組み合わせで作品を構成する。一方で、LOD(ラバンの運動理論)は、特定のジャンルやスタイルにとらわれない人間の動きの共通する部分を分析し、「動詞(主要な動作)」・「副詞・形容詞(動きの質)」・「名詞(身体部位)」等に分類し、「言語」として体系化したものである。特定のダンススタイルを学ぶことで、そのスタイル固有の文化を掘り下げてダンスを学べるというメリットがある。その一方で、ダンススタイルのイメージに対する好感度が低く抵抗感を抱く児童・生徒にとって、学習意欲そのものが低減してしまう可能性がある。LODの考え方で動きを学習する最大のメリットは、そうした特定のダンスに対する躓きを避け、中立な姿勢で動きの学びを促す点にある。

なお、LODでは「動きのアルファベット」と呼ばれる主要な動きが16あり、そのアルファベットにそれぞれ下位項目として細かい分類分けがされている。それらは、「動作(action)」・「静止(stillness)」・「曲げる(flexion)」・「伸ばす(extension)」・「回る(rotation)」・「移動(traveling)」・「方向(direction)」・「サポート(支持;support)」・「スプリング(跳ぶ;spring)」・「バランス(重心維持;balance)」・「フォール(バランスの喪失;falling)」・「ある状態へ向かう動作(motion toward)」・「ある状態から遠ざかる

図5 支援教材『白桃ロック』プログラム構成と歌詞

表1 LODの動きのアルファベット

1	Any Action		5	Any Rotation		9	A Spring		13	Motion Toward	
2	Stillness		6	Any Traveling		10	Balance		14	Motion Away	
3	Any Flexion		7	Any Direction		11	Falling		15	Any Still Shape	
4	Any Extension		8	Support		12	Destination		16	Any Form Of Relating	

(LODの動きのアルファベットを基に2005年 作成 酒向)

動作 (motion away)・「到達点への動作 (destination)」・「形をつくる動作 (shape)」・「関係づける動作 (form of relating)」である (表1)。

【三つの構成要素】

村田 (2011) は、ダンスの探究型学習で重要なものは即興的な「ひと流れの動き」であり、さらに「教師が示し動いた内容や材料やヒントにして、自分たちで動きを再構成」することであると述べる。そこで、①即興、②再構成そしてそれに加えて③定型、という三つの要素から本教材を構成することとした。定型をあえて組み込んだのは、近年のダンスの流行によって、習い事としてダンスに親しむ児童・生徒が急増している。そうした学習者にとっては、

揃って踊る定型の振り付けは「ダンスらしい」ものとしてダンス学習に求めているものでもある。ダンスが好きで学習者にとってもダンス授業の動機を高めるために、定型もあえて組み込むこととした。以下、「即興」・「定型」・「再構成」の三つの要素について述べる。

①即興 (即興的な閃き) の動き: 『白桃ダンス』の世界観の中で、個々人に即興的な動きを求める箇所が随所に散りばめられている。『白桃ロック』での一例をあげると、最後の後奏 (歌詞がない部分) で、各自が「はくとん」として、桃というイメージをもとに、移動し各自の動きとポーズを創るセクション

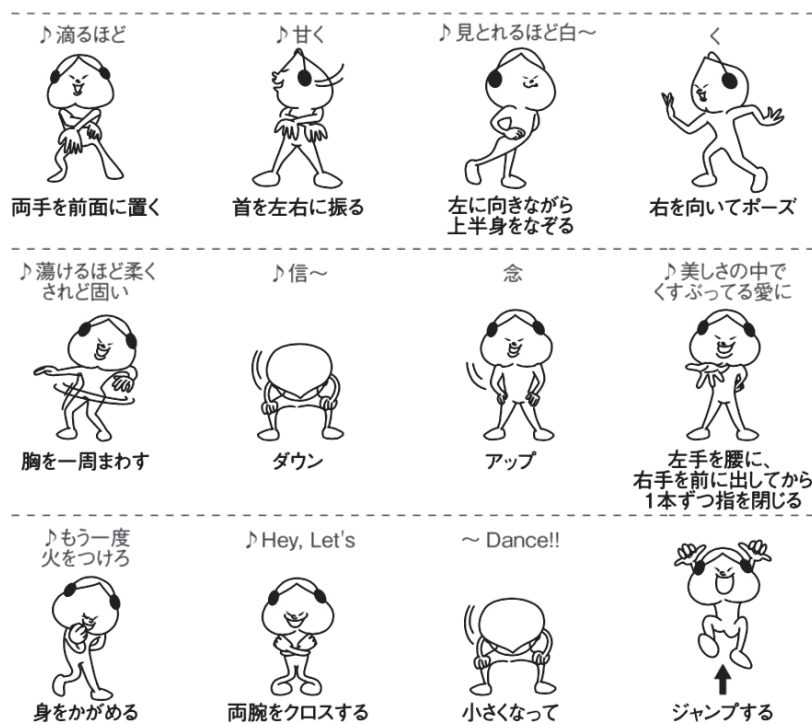


図6 定型振り付けセクション (A)

	5本の足型	足の動き
1		両足踏み切り、両足着地
		2 → 2 Two to Two
2		両足踏み切り、片足(左or右)着地
		2 → 1 Two to One
3		片足(左or右)踏み切り、両足着地
		1 → 2 One to Two
4		片足(左or右)踏み切り、同じ片足着地
		1 → 1 One to One
5		片足(左or右)踏み切り、反対の片足着地
		1 → 1 One to the Other

図7 再構成用セクション(B) 跳ぶ(Spring)の5つのパターン)

を設けた。

②定型の動き：エンターテイメント的振付を体験したい学習者用に、定型振り付けセクション(A)を作った。この振り付けセクションは、覚えやすいように、歌詞と関連づけた簡単なジェスチャー、動作で構成されている。覚えなければならない動き全てを、手拍子・歩く・走る・スキップなど、練習しないでできるレベルのシンプルな動作で行えるように工夫をした(図6)。また、胴部の「曲げる(flexion)」・「伸ばす(extension)」・「回る(rotation)」という動作を多く組み込んでいる⁸。

③再構成の動き：再構成の動きとは、選択可能な動作のことを表す。セクション(B)の「5つの足型」がそれに該当する。これは、LODの「スプリング(跳ぶspring)」(表1の9番)を採り入れたものである。跳ぶという動作を、踏切と着地という点から5つに分類する考えた方である。この組み合わせから全ての跳躍動作が成っていると考えるのである。その5つのパターンとは、「両足から両足(two to two)」・「両足から片足(two to one)」・「方足から両足(one to

two)」・「方足から踏切と同じ片足への着地(one to one)」・「片足から踏切と他の片足への着地(one to the other)」である(図7)⁹。

II. まとめ

本稿では、「白桃プロジェクト」で開発された『白桃ダンス』の教材内容を、核となる理念を踏まえつつ整理・分析を行った。紙幅の都合上、主に『白桃ロック』の方を取り上げたが、応用版である『White Peach Rap』は内容の力点が異なるため、別稿で改めて詳述したい。今後の課題としては、この教材が有効かどうかの検証と、教材に適した指導法の考案である。本教材は、教育現場での課題を解決すべく、多くの要素を盛り込んだ内容になっている。このことが、指導者および学習者にどのように伝わるのか、またその内容は教育現場で適しているかなどの効果の検証が必要であろう。また学習の成否は教師の指導力の影響が大きいことを考えると、この教材に適した指導法をセットで検討し、可能な限りまとめた形で教育現場に還元していきたい。

[付記] 本研究は、日本学術振興会科学研究費補助金(24700623)の助成を受けたものである。

[注]

¹ 「恥ずかしさ(羞恥)」は、表現運動・ダンス授業の阻害要因として長年議論されてきた。

² 寺山(2007)は、千葉の小学校教員139名を対象にした調査結果の中で、授業中に感じる困難として「学習者への対応」「動きの引き出し方」「指導言語」を、授業外に感じる困難として「教材準備」「学習者の実態」「指導者自身の悩み」「単元および領域」「時間数の確保」「学級経営に関すること」

等を挙げている。

³ 筆者は、こうした教員の意識が生じる背景を探るべく、男性教員を対象として聞き取り調査による質的研究を実施した(酒向・竹内・猪崎, 2016)。その結果、ダンス指導に必要な役割として「学習者の気持ちを解放させるための雰囲気づくり」・「ゴルフフリーへの対応」・「ダンスの演示」等が浮き彫りとなった。その一方で、「規律・規範の厳守」・「卓越した技能」からなる体育教師に求められる役割意識を強く抱き、特に「管理・規範」対「自由・解放」という、相反する方向性の狭間で葛藤を抱いていることが明らかとなった。調

査から前景化されたのは、教育現場における「ゴールフリー」という特性そのものの受け入れ難さという、より本質的な学校教育の問題であった。

- ⁴ 詳細はHP (<http://hakuton.jp>) を参照のこと。
- ⁵ やさいのようせいN.Y.SALAD：国内外で多くの賞を受賞したアニメーション（例：第7回日本映画テレビ技術協会映像技術賞，TVアニメ部門）。
- ⁶ PVのコンセプトは、「はくとんの中二病的(中二病：中学生の頃の、思春期特有の背伸びしながら言動を自虐する、ネットスラング)世界観」である。PV制作当時の台本（主となる物語）は、次の通りである。「日々踊りに明け暮れる毎日。ダンスに対する熱い思いを抱えながらも、孤独な日々。次第に仲間が増え、共に情熱をぶつけあいながら踊る。その情熱は、大学という日常空間を超えて、宇宙かなたまで。」
- ⁷ 世界で最も知られた動作記譜法ラバノーテーション研究の第一人者である、アン・ハッチンソン・ゲストによって考案された運動形態理論。身体教育現場での実践的な活用を目的として発展し、固有の記号システムを確立している。LODを活かした多様性と系統性のある動きの学習についての詳細は、(酒向・森田・川上，2018)を参照のこと。なお、筆者は教育機関でのLOD指導が行える国際指導者資格(Specialist)を有している(2019年時点で日本国内資格保有者5名のうち一人)。
- ⁸ 本プロジェクトの元となった、2011年の教師と協働して行なった中学生を対象としたダンス授業づくりでは、学習者の身体、特に体幹部のかたさが問題として浮かび上がった。リズムダンスは「自由に弾んで踊る」ことを目標とし、その中心となる部分は胴部にある。しかし、中学生は放っておくと胴部は板のように直立の状態をくずさず、へそを動かすという感覚を学習させる必要性を感じた。
- ⁹ 伝承遊びの一つ「ケンパー遊び」をイメージしてもらおうとわかりやすい(例えば「片足から片足」は「ケン・ケン」,「片足から両足」は「ケン・パー」等)。昔は遊びの中で多様な動き方を養っていたといえる。

[引用・参考文献]

青木眞(2005) 体育における学びとそのパラダイム。山本俊彦・岡野昇編 体育の学びを育む 伊藤印刷 1-11.

片岡康子(1991) 舞踊教育の思潮と動向. 舞踊学講義. 舞踊教育研究会編 大修館書店 112-121.

酒向治子 監修・振付・演出(2014) リズム系ダン

スのための新しい支援教材①～白桃ダンス～(ダンス教育プログラム 指導DVD & 音楽CD)

酒向治子 監修・振付・演出(2015) リズム系ダンスのための新しい支援教材②～白桃ダンス～(ダンス教育プログラム PV 動画DVD)

酒向治子・出原智波・平田麻里子・猪崎弥生(2015) 教師と教師教育者の協働による男女共習「現代的なリズムのダンス」授業づくりの試み－O大学教育学部附属中学校の事例的研究－. 岡山大学大学院教育学研究科研究集録 158: 169-181.

酒向治子・竹内秀一・猪崎弥生(2016) 中学校保健体育科の男性教員のダンスに対する意識－語りの質的検討－. スポーツとジェンダー研究 14: 6-20.

酒向治子・森田玲子・川上暁子(2018) 日本の身体教育にLODを用いることの意義－多様な動きの習得に着目して－. 岡山大学大学院教育学研究科研究集録 169:57-64.

寺山由美(2007)『表現運動』を指導する際の困難さについて－千葉県小学校教員の調査から－. 千葉大学教育学部研究紀要 55:179-185.

中村恭子(2015) 中学校の実態調査：ダンス男女必修化に伴う変容と課題. ダンスとジェンダー－多様な身体性－ 猪崎弥生・酒向治子・米谷淳編 一二三書房 102-119.

松本千代栄編(1980) ダンス・表現学習指導全書－表現理論と具体的展開－ 大修館書店.

村田芳子(2007) 最新楽しい表現ダンス 東京：小学館.

村田芳子(2011) 新学習指導要領対応 表現運動・表現の最新指導法 東京：小学館.

村田芳子・高橋和子(2009) 新学習指導要領に対応した表現運動・ダンスの授業. 女子体育 51, 7・8月号: 6-7.

森田玲子・酒向治子共訳 ダンスの言語 東京：大修館書店(原著：Guest, Ann Hutchinson/Curran, Tina. Your Move second edition. New York: Routledge, 2008.)

[動画]

・「白桃ダンス指導映像」<https://www.youtube.com/watch?v=TOKK4CeoGDk> (2019年9月2日) (動画投稿サイト：youtube 検索キーワード「白桃ダンス ロック」)

・「白桃ダンスPV」<https://www.youtube.com/watch?v=brVWKjpOOsi> (2019年9月2日) (動画投稿サイト：youtube 検索キーワード「白桃ロック」)